総統よ、いざさらば。

発狂将校

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
総統よ、いざさらば。

【Ｎコード】
Ｎ１９７３Ｚ

【作者名】
発狂将校

【あらすじ】
炎が立ち上ぼり、かつての帝都の姿を失ったベルリン。
廃墟と化した大ベルリンに、
総統へ永遠の忠誠を誓った武装親衛隊の男が一人立っていた。
この物語は、一人の軍人の最期を描いた物語である。
※２ｃｈ晒し中

（前書き）

この作品にはナチスとソ連の共産主義者が出ます。
虐殺等の描写はありませんが苦手な方はお戻りください。

たくさんの炎がかつての帝都を蹂躙する。
たくさんの炎が彼の生まれ育った街を包む。
その赤い炎はソ連の赤い旗を思わせた。
廃墟のようになってしまったドイツ首都ベルリン。
ベルリンのとある街角に、彼が立っていた。
彼の名はラインハルト・ディードリヒ。
国家社会主義ドイツ労働者党　武装親衛隊の少佐であった。

＊＊＊　三人称から一人称へ。

「状況を報告せよ！」
古きからの友人であり、士官学校時代からの戦友であり、優秀な参謀である男、
ハインリヒに我が部隊の戦況を報告させる。
「戦況報告……我が大隊は壊滅的被害を受け、生き残った者は敗走を続けています」
ハインリヒは髑髏と鍵十字の紋章が入った軍帽を深く被りしながら悲しげにそう呟いた。
「そうか、最後の精鋭である俺達の大隊が、壊滅するとはな」
俺はゆっくりと大隊旗の元へと歩みを進める。
全ての軍隊にとって軍旗は神聖なものであり、
これを奪われることは国への反逆にも等しいものである。
そのことは我が第三帝国、大ドイツ国も例外ではなかった。
奪われてしまうのであれば、燃やしてしまわねばならない。
それが軍旗の神聖さを守る唯一の方法である。
大隊旗の前で歩みを止め、一礼し鍵十字の大隊旗の旗に手を添える。

「……」
ハインリヒは黙ったまま動かない。
俺は大隊旗を持ち上げ、立ち上がる炎の中へ大隊旗を放り投げた。
大隊旗は瞬く間に燃え上がり、煙は天へと登って行った。
「我が大隊はこれにて解散す、我が大隊の神聖なる旗はヴァルハラへと送らん！」
俺とハインリヒはカッとかかとで音を立て、右手を斜め右上へと上げる。
『勝利万歳（ジークハイル）！』

＊＊＊

しばらくして、俺はそれまで閉ざしていた口を開く。
「ハインリヒ、お前は官邸地下へ向かえ」
ハインリヒはその言葉を聞くと掛けている眼鏡を軽く指で押し上げる。
武装親衛隊の軍服に身を包んだその姿はどこかしら悲しさを感じさせる。
「ラインハルト、アンタは行かないのか？」
ハインリヒは部下の顔から友人の顔へと変わっていた。
こっちもそうしてくれるとやりやすいものだ。
「俺は大隊指揮官、責任があるんだ、いや、それ以前に俺の信条が許さんよ」
俺はそう言うとふふっと苦笑いをする。
俺の信条、それは部下の面倒はキチッと見ることだ。
そう、死んでいった部下達のためにも、ここで仇をとらければ、俺の気がすまない。
「そうか、そうだな、それがアンタの信条だもんな」
ハインリヒはそう言うと銃器を手に取った。
おそらく俺の心の内を察してか官邸へ向かう気になったようだ。

（さて、赤軍の奴等もそろそろ来る頃か？）
俺はそんなことを考えながらハインリヒを見る。
するとハインリヒは準備を終えたようでこちらへと歩みを進めていた。
「じゃあな、私もすぐにそちらへ向かう、達者でな」
ハインリヒは別れを惜しむかのような顔付きで口にした。
そんな顔をされても寂しくなってしまうだけじゃないか。
「ふふ、ハインリヒ、ヴァルハラへは当分来なくてもいいからな、こちとてヴァルハラの女達と遊び倒していたいからな、お前みたいな眼鏡の味気ない男が来ても困るんだよ」
冗談紛いに俺はそうラインハルトに言った。
少しでもこの場を明るくしておきたかったからだ。
「おいおい、冗談はよせよラインハルト」
ハインリヒも苦笑いをする。
この笑いは心の底からのものではないだろう。
（当然か、こんな状況だもんな）
俺は頭を掻きながら煙草を軍服の内ポケットからガサゴソと探す。
その時、俺は何かに感づいた。
「ん？」
さっきまで聞こえていなかった音、それが遠くから近づいて来るのが分かった。
（この音は花火か？　いや？？迫撃砲だ！）
「ハインリヒ！　伏せろぉぉぉ！！」
危険を察知した俺はハインリヒへ飛び掛かり伏せさせた。
間も無く俺達が居た所へ迫撃砲の弾丸が落ち、
強烈な爆音と共にアスファルトを抉り大きな穴を開けた。
それと同時にたくさんの瓦礫が辺り一面に飛び散った。
何かの破片のようなものが俺の右腕に当たった気がした。
「赤軍の糞ったれ共が！　もうここはヤバイな……ハインリヒ、逃げろ！」

俺はハインリヒへ逃げるよう指を指して指示した。
「ああ、分かった！　アンタも達者でな、勝利万歳（ジークハイル）！」
ハインリヒは俺へ最後の敬礼をした。
俺もそれに答える為、右腕を上げるべく右腕に力を入れる。
「ジークハ……ぐっ！？」
右腕に電気のような痛みが迸った。
（この痛み……そうか、そういうことか）
俺はその痛みの原因がなんであるかを察知し、ただジークハイルとだけ叫んだ。
ハインリヒは首相官邸へ一直線で走って行ったのが見えた。
もうこれが最後の別れであろう。　次に出会うのは地獄か、それともヴァルハラか。
俺はゆっくり立ち上がると自分の右腕を見やった。
「ははっ、これは酷い、破片が腕に突き刺さってやがる」
赤い血が破片の突き刺さった右腕から流れ出た。
今こうやって立てているのはおおよそ神経があまりの痛さに麻痺しているからであろう。
（もう右腕は使えないな、畜生め……）
俺は近くの崩れ落ちたレンガへ腰かけた。
慣れない左手で内ポケットからもう一度煙草を探し出す。
そうやっていると箱のようなものが手に当たった。
多分煙草のケースだろう、俺はそれを内ポケットから引っ張り出す。
しかしそれは煙草のケースではなく、妻からのプレゼントとしてもらった小さいオルゴールだった。
「なんだ、アイツのか……ふふ、もう一度聞いてみるか……」
オルゴールの蓋を開けると美しく、それでもって勇ましい音色が鳴り響いた。
この曲は国家社会主義ドイツ労働者党党歌「旗を高く掲げよ」である。
蓋にはハーケンクロイツが描かれている、なんとも美しいものだ。

曲を聞きながら少し動くとズボンからポロッと煙草のケースが落ちた。
「はぁ、ここに入ってたのか」
煙草のケースを手に取り、試行錯誤しながらも左手だけで煙草をくわえることが出来た。
付属の火種で煙草に火を付け、口から煙を出した。
俺はオルゴールをじっと見ながら自分の家族のことを考えていた。
俺の妻と子はもうこの世にはいない。　そんなことを考えていると少し、悲しい気分になった。
誤爆事故……俺が重大なミスをしてまわなければ妻と子は無事だった。
生きていれば、俺はここで死を選ばなかったかもしれない。
あの二人は俺の心の支えだった。　唯一無二の心の支えだった。
「ぐっ……！」
俺の右腕の痛みがまたやってきた。
走る稲妻の如く、波のように痛みがどんどん増していく。
麻痺が解けてきたのであろう。
「部下達の痛みに比べればこれぐらい……ぐぁっ！？」
これまでに無いほどの痛みが右腕に迸る。
まるで右腕が燃えたぎっているようである。
「ぐぅぅ……」
人の歩く音が聞こえてくる。　あの方向から来るとしたら多分、ソ連の赤軍だろう。
俺はその痛みに耐えながらオルゴールを内ポケットへ仕舞うと同時にホルスターからワルサーP．38を抜き取り構えた。　足音からして歩兵の小隊であろうか。　足音は更に近付いてくる。
（さあ、来いよ、アカの力、とくと拝見してやろう！）
足音はどんどん近付いてくる。　今の俺にはこの軍靴の音が悪魔の足音に聞こえた。
「お前らが赤い悪魔なら、俺達は漆黒の天使さ！」

俺は手を震わせつつ、奴等が出てきそうな所へ銃口を向け、狙いを定める。
「……」
緊張感と痛みで押し潰されそうである。
ふと、総統の顔が頭に浮かんだ。
総統の顔を間近で見たのはＳＳ士官学校を首席で卒業して、実際に会った時である。
あの時の総統はとても澄んだ顔をしていて、聡明な方であった。
しかし、最近の総統は何かが違うのだ。
澄んでいた瞳は濁り、顔はやつれ、何かがあるとすぐに怒鳴り散らす。
狂い始めたのはいつの日か、そんなことが頭に浮かんだ。
（総統、あの日の時のような汚れのない貴方は何処へ……？）
俺は心の中でそう呟いた。
間も無く声が聞こえてきた、この言語はドイツ語ではない、ドイツ語でないなら答えは一つ、ソビエト連邦の言語だ。
俺は覚悟を決め、引き金に指を掛けた。
「東方の賊め！　赤い悪魔め！」
所々に赤いポイントのある軍服、金色の星の帽章、そして鎌と槌。
そう、東方の賊、赤い悪魔が姿を表した。
俺は敵の頭を狙い、引き金を引いた。
パンッと乾いた音が二つ鳴り響く。
弾丸は脳髄を破壊した。　鎌と槌は打ち砕かれた。　鍵十字は打ち砕かれた。
赤い悪魔と黒い天使は赤い血を流しながら倒れていった。

黒い天使の懐からは美しく、勇ましい音色が鳴り響いた。
その音色は遥か高い天へと登って行った。
遥か遠くへ、ヴァルハラへ向かって。

『総統よ、いざさらば』

（後書き）

急いで書き上げた代物です。
なんというか、予想よりかなり時間が掛かりましたね。
この作品ってどんな感じに見えるんですかね？
人によっては戦争否定に見えるだろうし、
人によってはネオナチな作品に見えるだろうし。
気になりますね。

最後に、第二次世界大戦で亡くなられた方々にお祈りを申し上げます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1973z/

総統よ、いざさらば。

2011年12月7日03時05分発行